かみさと文化財ニュース file №002

特集　神流川合戦の衝撃を考える

上里町立郷土資料館 文化財係
2021年 6月5日 刊行（不定期）

はじめに-神流川合戦を考える-

旧暦の6月18日・19日は、神流川合戦が行われた日です。この戦いは、今から440年前の天正10（1582）年に武蔵国を支配した北条氏（後北条氏）と上野国を支配した滝川一益が現在の上里町周辺で繰り広げたものです。「神流川の戦い」とも呼ばれ、関東最大の合戦だったとも言われています。今回は、この戦いについて紹介したいと思います。

それは「本能寺の変」から始まった

神流川合戦はどのようにして幕を開けたのでしょうか。戦国時代、武蔵国（現在の埼玉県及び東京都周辺）は、相模国（現在の神奈川県）の小田原を拠点とする戦国大名の北条氏が支配していました。一方、武蔵の北に接する上野国（現在の群馬県）は、甲斐国の武田氏の領地となっていました。

天正10年3月、天下統一を夢見る織田信長は、武田氏を滅ぼし、武田領であった上野国の支配を重臣の滝川一益に命じました。

しかし、その直後の6月2日に明智光秀が信長を裏切り、殺害する「本能寺の変」が発生、突然の主君の死によって信長の家臣団は混乱におちいりました。これを知って動きを見せたのが北条氏です。直ちに小田原城と寄居の鉢形城（はちがたじょう）で挙兵し、上野国に進軍を開始します。北条氏には、この隙に滝川を上野国から追い出して関東全域を手中に収めたいという思惑がありました。一方の滝川も北条側の動きを察知し、迎え撃つべく厩橋城（まやばしじょう：現在の前橋市）で挙兵します。滝川にも一刻も早く京都に戻り、光秀を討つことで信長の地位を継承したいという野望がありました。

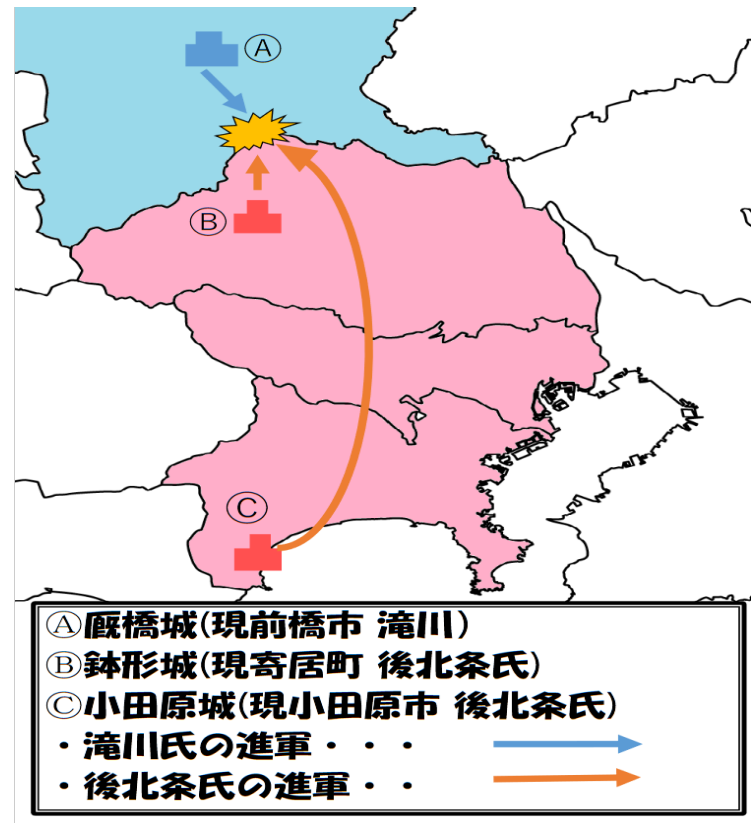

図1 神流川合戦における両軍の動き(イメージ)
青色の着色部が滝川、赤色の着色部が北条の勢力範囲である。両勢力は、その境界であった現在の上里町周辺（ の地点）で激突した。

写真1：大字金久保周辺の神流川河川敷
この周辺で両軍は刃を交える。

両軍激突-激闘の金久保城-

6月18日、両軍は上野・武蔵両国の境である金窪原（かなくぼはら：上里町大字金久保）と、びさいと原（大字毘沙吐）で激突しました（図1）。はじめ、鉢形城から進軍した北条氏邦が滝川方の軍と交戦を開始します。滝川軍を前に北条軍は劣勢に立たされ、北条側の金久保城（写真2）も激戦地となり落城しました。しかし、小田原から北条氏直の率いる軍が到着したことにより、形勢は逆転。戦いは翌19日まで続きましたが、滝川の大敗で幕を閉じます。戦火により町内では、安盛寺（あんせいじ：大字神保原町）や大光寺（だいこうじ：大字勅使河原）、福昌寺(ふくしょうじ：大字帯刀)等、町内の多くの寺社が焼失しています。特に大光寺は、この戦いで焼け落ち、山門以外が失われたと伝わっています（写真3）。

写真2：金久保城
大字金久保字内出に所在する中世城館跡。平安時代末頃の築城され、神流川合戦時は北条方の斎藤氏の居城であったと伝わる。

おわりに-神流川合戦の衝撃-

合戦によって、北条氏は上野国を手に入れることに成功しました。しかし、この戦いで最も得をしたのは、当時、備中高松城（現在の岡山市）に遠征していた羽柴（豊臣）秀吉です。秀吉は、信長の死を知るや驚異的な速さで都に戻り、6月13日に光秀討伐を実施、27日には「清須会議」を開き、他の織田家の家臣達から政治の主導権を奪い取ります。滝川一益は、神流川合戦によって出遅れたため、会議に参加することすら叶いませんでした。仮に神流川合戦が起こってなければ、後の秀吉の天下は実現しなかったかもしれません。上里町で起きた神流川合戦がその後の歴史にも大きな影響を与えていたのです。

写真3：大光寺勅使門（左）と残された矢傷痕（右）
神流川合戦で焼け残った山門と伝わる。現在も境内に保存されており、町の指定文化財として親しまれている。左側の柱には、矢傷とされる傷痕が残っている（右写真、→の部分）

【参考文献】
上里町史編集専門委員会編『上里町史』通史編上巻 1996年 p473 - 490
市村高男『東国の戦国合戦』吉川弘文館 2009年 p252 - 260
霜川遠志 訳『関八州古戦録』下 ニュートンプレス 1997年 p31 - 51

（郷土資料館 文化財係　林 作成 ）